研究ノート

男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考察

伊藤千恵[1)]・松井幸子[2)]・大野絢子[1)]・早川有子[1)]

Issues to be Considered Regarding Male Students in Maternal Clinical Nursing

Chie ITOH[1)], Sachiko MATSUI[2)], Ayako OHNO[1)], Yuko HAYAKAWA[1)]

キーワード：男子学生・母性看護学・産褥・臨地実習

I．はじめに

1990年度の看護教育カリキュラム改正により、男女の区別なく男子学生の母性看護学実習が行われるようになった。看護関係統計資料集[1)]によると、2006年4月の全国の看護系大学への男子入学者数は1,219名（9.8%）であり、男子看護学生は増加の傾向にある。

母性看護学は、「看護の対象である人間を母性の側面から捉え、リプロダクションの営みに焦点をあて看護を追及する学問[2)]」である。「リプロダクションの営み」は、妊娠・分娩・産褥期とそれら機能に限定されたものではなく、生涯にわたる、少なくとも思春期から更年期に至るまでのスパンで捉えるものである。が、母性看護学実習の対象は、妊娠・分娩・産褥期の人々であり、青年期の男子学生と年齢が近く、さらに分娩や授乳のような女性器に関わるケアが多い。また、「男子学生が母性看護学実習に対して、実習の場における所在のなさ、また異性である対象との関係のあり方について性差を意識することが多い[3)]」と報告されているように、母性看護学実習における戸惑いは女子学生に比べ大きい。

臨地実習では限られた時間の中で、学生が既習の知識・技術を活かし対象に看護展開を行い、看護実践能力を身に付けることが目的にある。そこで、学習効果を高めるためには、男子学生が主体的に母性看護学実習に取り組む姿勢が必要である。一方、教員・指導者の臨地実習場での働きかけも重要になる。布佐[4)]は、「状況を把握し、学生の思考レベルに合った働きかけを継続的に行うことにふさわしいのは教員である」と述べている。

今回、学生が臨床実習場面においてどのような戸惑いがあり教員・指導者の助言を必要としているのか、教員・指導者の対応は適切であったのか、受け持ち対象の反応はどうであったのかを明らかにすることとした。そして、今後の男子学生への臨地実習の指導の一助としたい。

II．研究目的

1．学生の実習記録と教員・指導者の記録から学生が助言を求めた場面と教員・指導者の対応を取り出し、学生が戸惑いと不安を感じた場面。
2．教員・指導者の助言や対応が学生と受け持ち対象に適切であったのか、求められる教育的配慮の内容。
3．受け持ち対象となった褥婦の、男子看護実習生の許容度。

以上1～3のことを明らかにすることを目的とする。

III．「母性看護学実習」の概要

1．学習到達目標

(1) 妊婦・産婦・褥婦及び新生児とその家族に対する個別的な援助について理解する。
(2) 妊婦・産婦・褥婦及び新生児の援助を実施するために必要な基本的看護技術が習得できる。

1）群馬パース大学保健科学部看護学科　2）横田マタニティホスピタル

(3)　妊婦・産婦・褥婦及び新生児の健康を保持増進するために必要な援助（健康教育）について学ぶ。

2．実習の体制と方法

本学は、２週間の母性看護学実習を行っている。１週間は、産科病棟にて学生１人が褥婦１人を受け持ち、他の１週間は選択実習で、学生自身が外来実習や入院している妊婦の看護実習などを選択し主体的な学びを取り入れている。

3．男子学生の実習への対応

大学は、男子学生の実習に理解があり、快く協力をしてもらえる対象であること、教員・指導者と一緒であれば可能な範囲で学生が看護技術を実施できることを、男子学生の受け持ち対象の選定条件としている。これを指導者に伝え、同条件に適する受け持ち対象を選定頂いている。

Ⅳ．研　究　方　法

1．男子学生の実習記録および実習レポートの分析

(1)　分析対象

群馬パース大学保健科学部看護学科2007年度３年次の男子学生計13名の、実習中の記録（実習記録・資料１）及び実習終了後に提出されたレポート

(2)　分析方法

男子学生の実習記録から教員及び指導者が男子学生と関わった場面を抽出し、意味内容の類似性に従い抽出化を行い、質的帰納的に分析した。

2．受け持ち対象となった褥婦の、男子看護実習生の許容度の調査

(1)　調査対象

男子学生が受け持った褥婦13名

(2)　調査方法

①調査票の作成：アンケート用紙２枚（資料２）

②調査票の配布と回収：アンケート用紙と研究の趣旨を説明した用紙を自宅へ送付した。アンケート用紙は無記名とし、回答者が特定されることのないよう手渡しではなく郵送を通した調査とした。

③分析方法：調査票の自由意見を意味内容の類似性に従って抽象化を重ね分析した。

3．研究期間

2007年９月３日～12月31日

4．倫理的配慮

男子学生には、学生の看護記録を教育指導における研究に使用することを文章と口頭において説明した。また、研究に使用する記録の内容と実習の評価は一切関係ないことを説明し同意を得た。

また、本研究は群馬パース大学研究倫理委員会において審査を受け承諾された。

Ⅴ．結　　果

1．男子学生の実習記録および実習レポートの分析

(1)　受け持ち対象と実習内容

①受け持ち対象

男子学生が受け持った褥婦は、初産婦７名（54%）、経産婦６名（46%）で計13名ある。年齢は、20歳代が６名(46%)、30歳代が６名(46%)、40歳代１名(８%)である。また、分娩については普通分娩９名（70%）、帝王切開術４名（30%）であった。男子学生が、分娩期から実習に参加できたのは１名のみであった。

②実習内容

実習の内容としては、悪露交換の見学を７名(54%)、乳房マッサージの見学を８名(62%)、授乳見学を９名（70%）、子宮底長の確認は帝王切開術の直後を除いて13名（100%）行うことが出来た。また、男子学生の受け持ち対象が乳房マッサージや授乳見学を拒否した場合でも、教員・指導者が依頼したのではなく、女子学生の受け持ち対象が進んで男子学生の見学を申し出ることもあり、産褥期の変化を全員学ぶことが出来た。

(2)　実習記録および実習レポートの分析

記録（資料１）からの男子学生の言動とレポート内容から抽出した男子学生の気持ちと学びの内容は42件であった。内容は、[実習初日の訪室]（10件）、[産褥期の変化の観察]（22件）、[家族とのコミュニケーション]（10件）の３つの場面に分類できた。

①実習初日の訪室

実習病院は、プライバシーを重視した個室が多く、男子学生が受け持ったほとんどの褥婦が個室を利用していた。廊下からは、室内が見えず完全に閉鎖されている。学生から、「何を話せばいいのか」（２件）「緊張する。部屋に入ってもいいかなぁ」、などの質問があった。このことに対して、教員・指導者は一緒に訪室し

表1 記録とレポートの分析

場　面	記録からの男子学生の言動	レポート内容
実習初日の訪室	・何を話せばいいのか (2) ・緊張する ・部屋に入ってもいいのかなあ いい患者さんを受け持たせてもらってよかった。心配していたけど、何でも見学させてもらえて勉強になる ・回診でDrが部屋に来るまで、部屋・受け入れてくれるのか不安があった ・部屋の中で、受け持ちから遠くはなれたところで立っていた (7件)	・今までの実習とは異なり、ほとんど自分で行えるので、どのように接したらいいか、また、何をしたらいいのかわからなかった (2) ・今までの実習では、後期高齢者を受け持つことが多かった。対象の年も近く、女性である点で戸惑った ・受け入れてくれるのか不安があった (3件)
産褥期の変化の観察	(分娩期の陣痛) ・こんなに張るんですね。こんなふうに違うんですね (子宮底の確認時) ・どこを触れたらいいのですか ・臍周囲を触れたけどわからない ・1日でこんなに変化するのですね ・すみません ・僕は、部屋から出た方がいいですよね (悪露の確認時) ・教科書通りの色なんですね ・毎日、悪露交換は見学していたけど、彼の謙階ナプキンでの変化を見ることができなかった (乳汁の分泌及び乳房緊満の確認時) ・受け持ちから「触れてみますか？」と声を掛けられ行う ・どのあたりですか？これを張りというんですか？ (10件)	・実習期間を通して、ルービンの母性行動の受容期と保持期、自己欲求から子どもへの関心や子育てへの変化・母子関係について学ぶことができた (4) ・自分は男ということもあり、乳房などわからないことが多かった (2) ・女子学生と同様の看護実践や病棟見学はできないのではないかと心配だった。 ・何をしていいのか、どこまでケアが行えるのかわからなかった ・教員のケースに対する説明の仕方を参考に、わかりやすい説明方法を身に付けることが今後の課題 ・個人差があるので、日々注意深く観察することが重要であった ・見学できないと思っていた自然分娩が見学できた (12件)
家族とのコミュニケーション	・旦那さんがいるので、部屋に入ったら悪いですよね ・学生が受け持っていることは、夫に話してあるそうですが、男子学生とは話してないそうです ・家族が面会に来ているけど、何を話したらいいかわからない ・家族も上の子をどうしたらいいか困っている (4件)	・退院後の家族間の育児支援について話をし、家族の育児に対する姿勢の必要性を学んだ (2) ・家族に対してもコミュニケーションが重要であることがわかった ・受け持ちとコミュニケーションをはかり信頼関係をつくることが大切である ・妊・産・褥婦のみではなく、その家族やサポート可能な周囲の人々にまで視野を広げる ・夫への指導が足りなかった (6件)

たり、分娩時の様子や家族のことなどを話したらどうか、などのアドバイスを行った。受け持ち対象と2人になってしまい、男子学生は閉塞された個室の中で会話が続かなかったらどうしようという緊張と不安があった。レポートの中で、「どのように接したらよいのか、また、何をしたらよいのかわからなかった」、「今までの実習で受け持ってきたケースでは、後期高齢者で男性が多かった。母性の実習では年も近く、女性であるという点で戸惑ってしまった」のように実習を振り返っていた。

②産褥期の変化の観察

乳房緊満の状態と子宮底長の観察などの触診時に学生が触診を行ってもよいのか戸惑いが見られた。学生として、触診の方法がわからないことと本当に乳房や腹部に触れていいのかという不安があった。指導者が学生に観察の方法を見せてから必ず一緒に学生と行った。また、男子学生の前で受け持ち対象に学生が実施することの許可を確認し、承諾をその場面で得ることで、学生自身も納得し安心をして観察を行うことが出来た。さらに、悪露交換を観察できない学生に対しては、指導者が入院している褥婦の悪露を産褥1日目から4日目まで揃え、悪露の変化が観察できるよう工夫した。レポートの中で、「自分は何をしていいのか、どこまでのケアが行えるのか分からなかった」、「見ることができないと思っていた自然分娩をみることができた」、「私自身男性ということがあり、女子学生と同様の看護実践や病棟見学はできないのではないかと心配だった」、「教員のケースに対する説明に仕方を参考に、

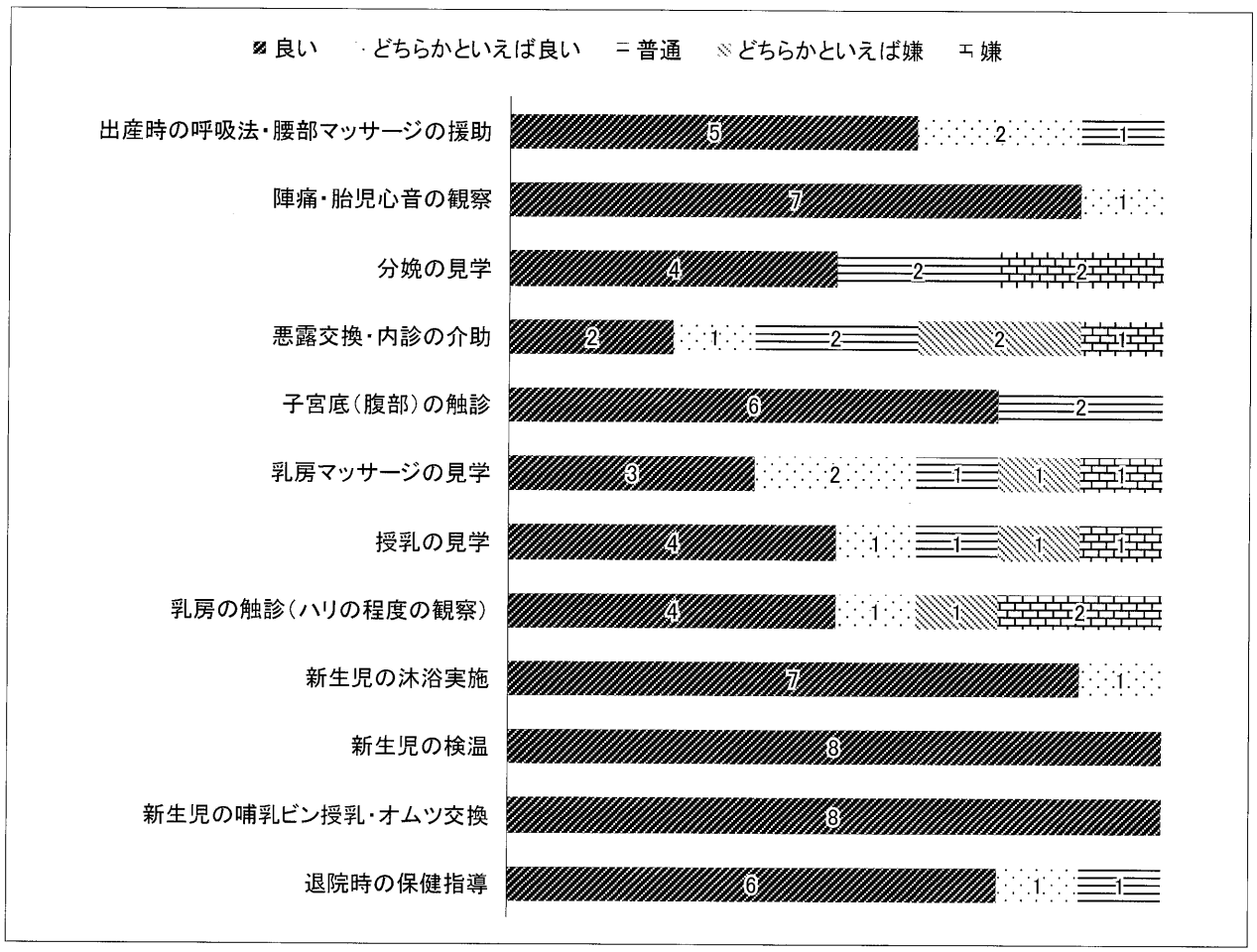

図1　男子学生の実習内容における褥婦の意見

わかりやすい説明の技術を身につけることが今後の課題」等が表現されていた。

③家族とのコミュニケーション

男子学生が特に意識したのが夫への配慮であった。それには、臨床指導者が同意を得た後、教員と男子学生が挨拶に訪室した際に、夫が同席しており受け持ちを断られたこと、また、男子学生の受け持ちを夫に話していないので、夫の面会時には控えて欲しい、などの受け持ち対象の言動が背景にあった。そのため、家族との関わりに消極的になってしまい、家族が新しい家族の誕生をどのように受け止めているか理解することが難しかった。このような場面においては、直接的な家族とのコミュニケーションが取れなくても、受け持ち対象を通して夫や家族の言動を確認したり、看護記録からの情報や申し送りの場面などを利用し間接的な関わりを持つように指導を行った。一方、同姓であることで夫と良好なコミュニケーションを取れていた学生もいた。レポートの中で、「退院後の家族間の育児支援ついて話をし、家族の育児に対する姿勢の必要性を学んだ」（2件）、「夫への指導が足りなかったと感じた」、「妊・産・褥婦のみではなく、その家族やサポート可能な周囲の人々にまで視野を広げる必要がある」、と表現している。

2．受け持ち対象となった褥婦の、男子看護実習生の許容度の調査

(1)　回答率

配布数13名、回答数8名、回答率62%、有効回答率100%であった。

(2)　実習前の感想

男子学生の母性看護学実習に対して、6名（75%）が「いいことだと思う」と答えており、2名（25%）は「しかたない」と答えていた。

(3)　実習後の感想

男子学生の母性看護学実習に対して、7名（88%）が「いいことだと思う」、1名（12%）は「しかたない」のままであった。

表2 アンケートの結果

質問内容	受け持ち対象の感想・意見
男子学生・教員・指導者の関わりについて	・無記入（3） ・学生・教員とも気を使ってもらい申し訳なかった（2） ・学生が実習に積極的に参加し、熱心に取り組む姿が見られ好感が持てた（2） ・指導者の方も面倒見がよく、いろいろアドバイスをしていた ・学生は大変だと思うが、携わっている時間を有効に使い、もっとズーズーしく対応してもいい ・学生が不安な点については、教員・指導者に確認してから、再度話をしに来てくれたので、不安はなかった ・学生に対して、教員及び指導者は手やしぐさを使い教えた方がいいと感じた （11件）
教員及び病院スタッフが同席したほうが良かった場面	・無記入（6） ・なし（1） ・陣痛の痛くないときに、学生が何人もきて驚いた （8件）
その他の意見・感想	・まじめに学ぼうという姿勢のある学生であれば、男女関係なく学ぶ機会を与えてあげたい（3） ・病院のスタッフ以外に学生・教員・指導者などが頻繁に来てくれて、大変助かった（2） ・実習した事が無駄にならないよう頑張ってほしい（2） ・産婦人科の人手不足を考えると、妊婦としては性別を問わず、病院スタッフが充実しているほうが安心できる。そのため、男子学生の実習は必要だと思う ・臨床のお手伝いができてよかった ・男性と考えず、全てにおいて協力してあげればよかったと後悔している ・「男子学生の実習」と聞いて、「えっ？」と正直思った ・帝王切開に付き添ってもらい、すごく心強かった ・特になし （13件）

複数回答（回答数）

(4) 実習内容における褥婦の意見

実習内容については、3名(43%)が全ての項目(資料2)に男子学生が行って「良い」と答えていた。また、「分娩の見学」「乳房の触診（ハリの程度の観察）」について、「嫌」と答えた人は2名（28%）のみであった。また、新生児のケアについては、全員が「良い」「どちらかといえば良い」と答えている。男子学生・教員・指導者の関わりについては、6名（74%）が「良い」、1名（13%）が「どちらかといえば良い」、1名（13%）が「普通」と答えていた。その理由として、「学生が実習に積極的に参加し、熱心に取り組む姿が見られ好感が持てた」、「指導者の方が学生に丁寧に指導していた」などあった。その他の意見と感想に、「まじめに学ぼうという姿勢のある学生であれば男女の関係なく学ぶ機会を与えてあげたい」(3件)、「病院のスタッフ以外に学生・教員・指導者等が頻繁に来てくれて、いろいろ聞けて大変助かった」(2件)、「帝王切開だったので付き添ってもらい、すごく心強かった。実習内容すべて実習してもらった」等があった（図1）。

Ⅵ. 考　　察

1. 男子学生が置かれている状況を踏まえた指導

臨地実習について、菊永[5]は「初めて女性を受け持ち、妊産褥婦に対して抱く性差から抵抗感や劣等感を抱き、実習に消極的になる者が多い」と述べている。本研究においても、男子学生が「今までの実習で受け持ってきたケースは、後期高齢者で男性が多かった」と述べていた。このように、母性看護学実習の当初、受け持ち対象に対して年齢の近い女性であることなどから遠慮や混乱がありコミュニケーションを取ることに不安を感じる。さらに、受け持ち対象により、男子学生が実施できる看護ケアに違いがあり、実施できる看護ケアに対しても不安を感じる。しかし、学生は不安や緊張感を抱えながらも実習を経験することで自分に対する理解や自信を深め、自己受容性を徐々に高める。不安や緊張感は、実習に関してネガティブな印象のみではない。

教員・指導者は、男子学生が不安と緊張の中で実習環境に慣れるよう、受け持ち対象との橋渡しをすることが求められる。また、男子学生の多くが「対象の受け入れてもらえるのか」「実習が行えるのか」などの不安を抱く。今回、悪露交換の場面が見学できなくても、

悪露の変化を指導者の工夫により学習することができた。このような、工夫を重ね学びのある臨地実習を行っていかなければならない。

2．受け持ち対象となった褥婦の、男子看護実習生の許容度について

本学では、男子学生1名が褥婦1名受け持つことが前提とされ実習が行われ、全男子学生が実施できた。また、分娩に対しては、経腟分娩を見学できた学生は少なかったが、帝王切開術にて出産の様子を全男子学生が学ぶことができた。このことは、実習病院の理解と協力及び教員・指導者の働きがあり実施することができた。さらに、最も重要なことは妊産褥婦の理解と協力がなければ実施できないことであった。

今回、行ったアンケートによると男子学生の実習内容による受け入れは良かった。アンケートでは、「真剣に積極的に実習に参加していれば応援したくなる」「まじめに学ぼうという姿勢があれば男女関係なく学ぶ機会を与えてあげたい」などの意見が聞かれ、看護学生としての学ぶ姿勢が対象の協力を得ることができると考えられる。

男子学生の実習内容に対して、肯定的な意見が多く聞かれたが、直接的な看護ケアを全て学生が経験しなければならないわけではない。教員・指導者は、受け持ち対象と男子学生の気持ちを考慮し、看護ケアを行うことに意義があるのではなく、母性看護を学ぶことに意義があることを伝え理解を求めることが重要である。今まで、本学では男子学生については、分娩期から受け持ち対象と関わることで、受け入れてもらうことができると考え実施してきた。しかし、今回の実習風景や受け持った褥婦のアンケートから、産褥期からでも男子学生の学習に協力したい、学ぶ機会を与えてあげたいと考えていることがわかった。受け持った褥婦の中でも、指導者が承諾を得た後、教員が男子学生と挨拶に訪室した時に夫や家族を意識して断られた事もあった。褥婦自身は、男子学生を受け入れても夫や家族が不安を持ち、男子学生が受け持てないケースがある。母性看護は家族を含めた支援が必要なため、家族に対しても十分に説明し理解してもらい学生の実習を進めなくてはならないと考える。

3．母性看護学実習の看護ケアの特徴と男性

母性看護学において看護ケアを考えた時、「女性中心のケア（WWC：Women-centered Care）」と「家族中心のケア（FCC：Family-centered Care）」という2つの概念がある。新しい家族の誕生を迎え家族の役割が、妻から母親へ、夫から父親へと変化する。最近、出産準備教室に父親の姿が増えてきた。男性の育児休業も少ないが聞かれる。看護のケアの対象は、女性のみではない。育児参加や産後の妻のサポート方法がわからない夫に対してケアをしていくもの必要である。同姓である男子学生が、父親の相談相手になっていた場面もあった。母性看護学の講義の中では、家族への支援が重要なことは教授していても、女性のライフサイクル・妊娠・出産・産褥に対することが中心である。そのため、母性看護の対象は女性と考える傾向がある。実習前から学生に対して看護ケアの対象を家族も含めた女性とし、先入観を持たせない働きかけが必要と考える。

Ⅶ．結　　論

1．男子学生は、[実習初日の訪室]、[産褥期の変化の観察]、[家族とのコミュニケーション] の場面において不安や戸惑いを感じ、教員・指導者に助言を求めていた。
2．実習前から講義や実習のオリエンテーションを通して、看護の対象への先入観を持たない指導を行う。また、家族を含めた、特に夫に対しての看護ケアを学べるように教員・指導者が男子学生と共に実践していく。
3．本研究において、学生の実習態度が受け持ち対象の男子学生の受け入れをよくすることが明らかになった。そのため、教員・指導者は学生が学習目標を持ち積極的に実習に取り組めるよう働きかける。

Ⅷ．ま　と　め

今回の実習と研究を通して、褥婦の男子学生に対する受け入れが良かったことに驚いた。これは、社会が男子学生に対して期待をしているためと思われる。今回のアンケートは、快く受け持ちが出来た褥婦を対象に行ったため受け入れがよかったのかもしれない。しかし、受け入れてもらえるか不安を抱いている男子学生にとっては、今回の結果は励みになると思われる。また、教員・指導者は、対象となってくれた褥婦の意見を尊重し、学生の学習意欲を高める働きをしていかなければならない。

Ⅷ. 謝　　辞

本研究を行うにあたり、御協力いただいた褥婦の方々、及び看護学科３年の男子学生13名、並びに臨床スタッフの方々に深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

1）日本看護協会出版会編：平成18年看護関係統計資料集、日本看護協会出版会　2006：p.74.
2）山田里津監修：最新看護教育ガイダンス　臨地実習編、医歯薬出版、東京　1996：p.219.
3）斉藤祥乃：男子学生の母性看護学実習の一考察、母性衛生　42(1)：2001：pp.230-241(引用 p.230).
4）澤井秀子他：一県内看護師養成機関における男子学生への看護教育現場での配慮　第１報、看護教育(37)：2006：pp.72-74（引用 p.73).
5）布佐真理子：臨床実習において看護学生が看護上の判断困難を感じる場面における指導者の働きかけ日本看護科学会誌　19(2)：1999：pp.78-86
6）横川美代子他：QOL 調査からみた男子看護学生の特性　看護教育　(31)：2000：pp.69-71（引用 p.71).
7）菊永　淳：男子学生が母性看護学実習を行う意義とは　看護教育　47(4)：2006：pp.360-361(引用 p.361).
8）藤田美津子：初めて臨床実習を前にした看護学生の不安―学習への動機づけとして―　看護展望　21(3)：1996：pp.98-108.
9）宮本政子他：母性看護学実習における学生の学習意欲に関する要因―実習に対する意識と実習評価から―　母性衛生　42(1)：2001：pp.198-206.
10）西田妙子：１人で褥婦を受け持つ実習形態へのとりくみ　看護教育　42(1)：2001：pp.19-23.
11）新井香奈子他：母性看護技術到達度の認識に関する調査・看護師教育単独校と助産師教育併設校の臨床実習指導者の比較から　看護教育　45(12)：2004：pp.1100-1105.
12）増田昌恵他：男子学生の母性看護学実習前後における意識調査―今後の実習のあり方の検討―　看護教育　(37)：2006：p.75.
13）池田かよ子他：母性看護実習の不安とその対処行動について　看護教育　47(4)：2006：pp.1356-359.
14）菊池泰子：母性看護学に苦手意識を持たせる要因看護教育　37：2006：p.63-65.
15）松田安弘他：男子看護学生の学習経験に関する研究　看護教育学研究　10(1)：2001：pp.15-28.

（資料１）

毎 日 の 記 録　　年　月　日

本日の目標：

産褥　　日目

学籍番号　　氏名　　妊娠　　週　　日　No.7-1

時間	行動計画	実施内容	ケースの言動	考　察	教員・指導者
評価					

群馬パース大学（平成19年度）

（資料２）

1．男子学生が産婦人科実習をさせていただくことに対して、受け持たせていただく前・実習中・受け持たせていただいた後の感想をそれぞれ当てはまる欄に○をつけて下さい。

	受け持たせていただく前	実　習　中	受け持たせていただいた後
1）いいことだと思う			
2）しかたない			
3）できれば関わりたくない			
4）いやだ			
5）その他（意見をお書き下さい）			

2．以下の項目の実習内容について男子学生が実習を行うことについてどのようにお考えですか？各項目について、ご自身のお考えに一番近いものに○をつけて下さい。

	良い	どちらかといえば良い	普通	どちらかといえば嫌	嫌
1）出産時の呼吸法・腰部マッサージ援助					
2）陣痛・胎児心音の観察					
3）分娩の見学					
4）悪露交換・内診の介助					
5）子宮底（腹部）の触診					
6）乳房マッサージの見学					
7）授乳の見学					
8）乳房の触診（ハリの程度の観察）					
9）新生児の沐浴（お子さんの沐浴実施）					
10）新生児の検温					
11）新生児の哺乳ビン授乳・オムツ交換					
12）退院時の保健指導					

上記以外の項目について意見があればお開かせ下さい。

3．男子学生・教員・臨床指導者（病院スタッフ）の関わりについて率直な感想をお聞かせ下さい。

	良い	どちらかといえば良い	普通	どちらかといえば悪い	悪い
男子学生					
教　　員					
指　導　者					

今後の参考にさせていただきたいので、よろしければ内容をお聞かせください。

4．男子学生の看護実習場面において、教員及び病院スタッフが同席したほうが良かった場面はありますか？そのような場面があればご記入下さい。

5．その他、何でも率直な意見をお書き下さい。

＊年末のお忙しい中、ご協力ありがとうございました。